

海外視察報告

台湾での第3回アジア作物学会に参加して

尾形 武文

(福岡県農業総合試験場豊前分場)

第3回アジア作物学会議が1998年4月28日～5月2日までの5日間、台湾省台中市で開催された。第1回は1992年に韓国のソウルで、第2回は1995年に日本の福岡県で開催され、私は第2回の参加に引き続き2度目の参加となった。今回はアジア地域の農業の技術問題の把握、台湾情勢収集を目的に参加しました。しかし、海外視察報告というほどの内容に耐えられるかは極めて疑問であるが、アジア作物学会議での様子やエクスクーショで知り得た台湾の農業情勢についてご報告できればと思っている。

福岡農総試からは松江勇次氏と2人で参加した。福岡空港発の中華航空機で飛ぶこと2時間10分、台北中正空港に降り立ち、台北市行きのバスに飛び乗り、台北駅から自強号に4時間余り(事故のため大幅に遅れる)で台中駅(第1図)に到着した。台中駅からタクシーで10分程で、宿泊先の全国大飯店(ホテル)へ無事到着した。

台湾はほぼ九州と同じ大きさで、台北を博多に仮定すると台中市はちょうど熊本市辺りと考えていただければよい。台中市は台湾省の省都が置かれたこともあり、台湾経済を支える中核都市として発展してきた。さらに、台中市という有名な水稻品種「台中65号」を生んだ土地であるだけに、一度は訪問したい場所であった。台湾は亜熱帯気候に属して暑いが、車中や建物の中は冷房が良く効いていて長く居ると寒い程であった。

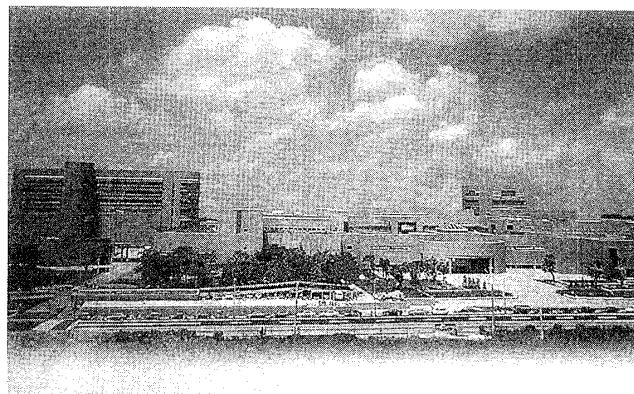
1. アジア作物学会議の概要

アジア作物学会(ACSA)主催の第3回アジア作物学会議(The 3rd Asian Crop Science Conference, ACSC)が1998年4月28日～30日の3日間、台湾省台中市内の国立自然科学博物館(第2図)を会場として開催された。

まず、4月28日9時よりACSA会長Cheng-Chang Li氏による第3回アジア作物学会議(テーマ:21世紀に向けた危急食糧の地域的な生産戦略)の開会宣言がなされ、学会関係者や地元有力者の挨拶が続き、少し曇り模様であったが蒸し暑い戸外で濃い緑の木々を背景に集合写真の撮影が行われた。その後、豪華なモーニングブレイクの後、いよいよ学会が始まった。まず、基調講演を日本の石井龍一氏と台湾省のTe-Tze Chang氏の2名が行った。石井氏は「持続型農業によって、米の高収量を達成させるための作物生理学者から育種家への提案」という題で、低投入・持続的な農業のもとでの安定生産性をどの様に新しい水稻品種へ付与していくかを提案した。次に、Te-Tze Chang氏は「21世紀の不足食糧を充足させるために作物学は何をすべきか」という題で、植物遺伝・育種学、作物生理・生態学、土壌化学、作物品質・加工、分子遺伝学等の今まで行われてきた研究プロジェクトを紹介し、作物を取り巻く学問の研究協力が必要であると力説した。両氏の基調講演は午前中に行われ、多



第1図 台湾省台中駅(赤煉瓦造りの立派な建物)



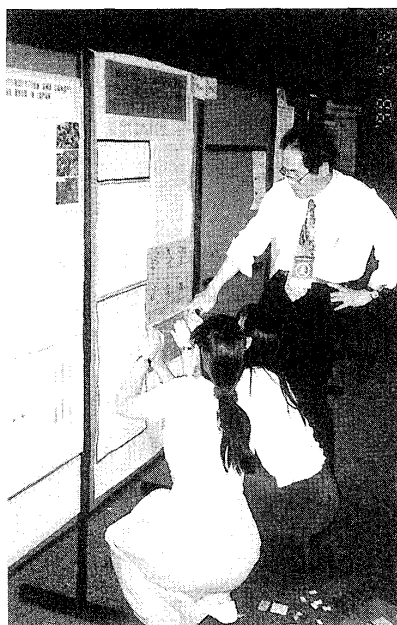
第2図 アジア学会議の会場、国立自然科学博物館全景(プログラムより複写)

くの聴衆で会場は熱気に溢れた。

午後から4月30日までは2会場に分かれて、67課題の口頭発表が行われた。ポスター発表は4月29日の午後から口頭発表会場の隣の会場で30日まで掲示と説明が行われた。口頭発表では環境ストレス、持続型農業、水稲を基本とした作付体系、種苗改良、新作物、作物改良、コメの品質と収量、作物生産に関するその他のトピックスという8つのテーマに分かれて各々のセッションでは3～16課題が発表された。ポスター発表も環境ストレスの分野では耐塩性、耐乾性、耐冷性、耐酸性、酸性土壌での植物のストレス耐性の発表があった。持続型農業の分野では台湾やスリランカでの持続型農業の紹介、持続型農業による茶や陸稲の栽培法等の発表があり、持続的な作物生産への関心はさらに高まっていく印象を受けた。水稲を基本とした作付体系の分野では、日本、ベトナムやタイ国における輪作体系の有利性、メコンデルタにおける窒素の利用効率等の発表があった。新作物関連では食用アカザ、韓国における遺伝資源管理、台湾での薬用ハーブの組織培養等の発表がされた。作物改良ではバイオテクノロジー等の最新の技術を用いた作物育種や稲、大麦や小麦の家系分析手法の紹介がなされた。コメの品質と収量の分野では、11課題の発表があったが、良食味品種の育種や栽培法の改善等、収量性は重要な課題ではあるものの食味にも関心が高くなっていることが印象づけられた。最後に、その他の課題では水稲群落の反射分光の季節変化、水稲根系の発達と養分吸収、雑草数種の種子発芽特性、ベトナム農業と作物研究、インド

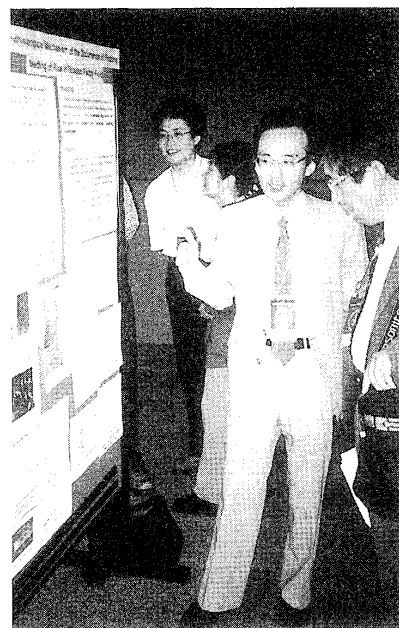
ネシアの第2期緑の革命、大豆の葉面積と形の遺伝様式等の発表があった。これら口頭発表は多岐にわたり、文字どおりアジア地域の作物学の現状が3日間の内に垣間みられる感があった。

次に、ポスター発表も口頭発表と同じテーマで、87課題が発表された。会場でのポスターの掲示は28日か



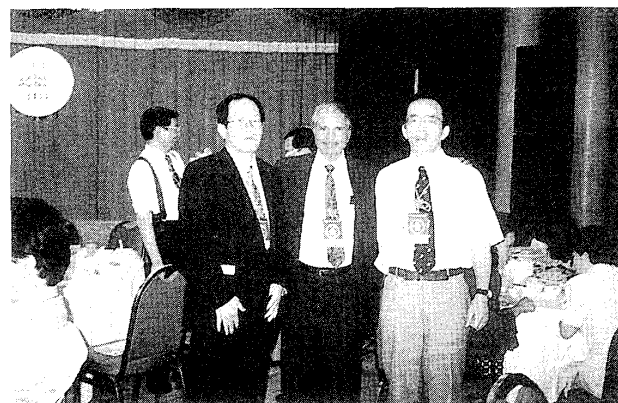
第3図 ポスター掲示風景 (女子大生が手伝っている)

ら行われ、掲示に当たっては地元の女子学生が親切に掲示してくれる場面(第3図)が見られた。ポスターの内容は先の口頭発表と同じような課題が多くみられたが、分子レベルでの作物改良法や水稲の湛直栽培に不可欠な根の形質に関する報告等これからのアジア地域での作物学



第4図 ポスター会場での説明風景

に新しい息吹を感じさせる報告もみられた。また、台湾においても米の食味への関心は強く、日本の新旧品種の食味比較試験の結果にも大変な興味を持たれ、今後の食味改良のための遺伝資源として大きく注目された。このポスター会場の外はリビングルームになっており、コーヒーを片手に持った聴衆がポスター発表者と研究結果の



第5図 宴会での記念撮影 (左より、松江氏, Dr. Khush, 著者)

議論を行う姿(第4図)がみられ、ポスター会場は掲示から発表の間中、終始和やかな雰囲気にも包まれていた。

宴会の部では、29日の夜は歓迎会が催され、ACSA会長 Cheng-Chang Li 氏による乾杯の後、関係諸氏の簡単な挨拶と日本作物学会の谷山会長からお祝いの挨拶があった。谷山会長は、新会長だけに新しくなった作物学会誌の英文誌を持参して流暢な英語で日本作物学会のPRをきっちりと行っていた。その後、円卓(6～7名)を

囲んでの宴が催され、主催者である学会長等が各円卓を回り、紹興酒での乾杯が続いた。私はその宴の間、IRRIのDr. Khush氏とすっかり記念撮影(第5図)をしたり、外国や日本人の著名な先生方と知り合いになれ、大変有意義な時間を過ごさせていただいた。29日は夕食会が行われ、30日はお別れパーティーが続いた。アジア作物学会旗が次の第4回目の開催国フィリピンに手渡され、会議は終了した。

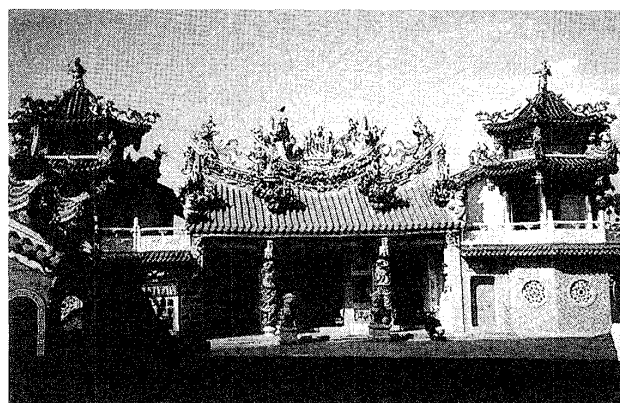


第6図 日月潭での水質浄化の試み

2. エクスカーションの概要

エクスカーションは辞書で引くと「小旅行」の他に「脱線」という意味もあるようである。

作物会議が終わり5月1日～2日に亘って、エクスカーションが行われた。参加者は42人で日本人が大部分を占め、一台のバスで行動するには適当な人数でした。1日は朝9時に全国大飯店を出発し、台中市近郊を中心に手工芸センター、お茶の生産団体の鹿谷農会、台湾の9つの先住民族の生活様式や歴史が解る九族文化村、避暑地として有名な日月潭(Sun-Moon Lake) 宿泊となるコースであった。また、2日は美しい日月潭を遊覧船で観光し、淡水魚の養殖の様子や水質を浄化するためのクリーニングクロップの水上栽培(第6図)等、観光の途中にも環境回復のために色々な試みがなされている様子を視察できた。その後、花き園芸で成功している田尾農会を視察した。田尾農会に到着すると、美しい寺廟(第7図)が目に入りこの地域の繁栄ぶりが窺われた。この農会では共同育苗センターを視察した。ここでは挿し木する時に活着を促進するためのホルモン処理を行う(第8図)等、新しい農業技術を積極的に取り入れ経営の向上に努めていた。この農会で生産される花きは国内はもとより海外にも輸出しており、圃場では日本の「母の日」



第7図 田尾地区の美しい寺廟(地区の繁栄が伺われる)



第8図 園芸育苗センターでの発根促進処理風景

をねらったカーネーションが蕾を大きく膨らませていた。この地域には広い庭付きの2～4階建ての立派な農家が多かった。また、台湾でも減反政策があり、減反率は40%余りにもものぼるとのことであったが、換金性の高い転作作物がなく、亜熱帯地域特有の椰子の木(ピンロウ)が転作田に植えられている景色が移動中のバスから観察された。このピンロウは樹木であるため、台湾からは水田が消えていると嘆いておられた。水田転作作物としての新作物探索の重要性が感じられた。

このようにアジア作物学会は5日間の日程だったが、有意義な会議とエクスカーションが終わった。

3. 台湾での個別行動

私は同行の松江氏とともに、学会諸兄とは別行動を行った。出来る限り生の台湾を知るためである。交通機関は鉄道、市内バス、高速バス、タクシーを使った。まずは、一見の価値がある故宮博物院、台湾総統府、台北駅周辺の建物群(立法院、司法院、監察院、中華工藝館)、台中夜市、彰化台湾民族村等である。限られた時間を有効に使うため積極的に行動した。この行動で感じたことは、台湾の方々は実に親日家が多いことである。街で

は気軽に声を掛けてくるし、列車内で立っていると席を交代してくれたり、道案内も進んでしてくれる。漢字が通じるので、旅行ガイドさえ持っていればどこへでも行ける。なんといっても治安の良い国であり、英語は若い人に通じる。いざとなれば日本語を話せるお年寄りの方を探せば道に迷ったときも大丈夫である。簡単しかも安全に行動が出来るので嬉しくなる。このように2人の別行動を満喫しました。

4. 学会に参加して

私は第2回のアジア学会に続き、2度目の参加であった。海外の学会であるため、なおさら日本人の研究者と親しくなれた。最もお近づきになれた（私自身が勝手に思っているだけだが…）のが津野幸人名誉教授、谷山鉄郎学会長等日頃接することの出来ない方々であった。その他様々な学会誌でお名前を拜見する方々とお会いし、知り合うこともできたし、彼らの考え方、研究姿勢、人生観等にも触れることができた。もちろん外国の研究者とも

親しくなれた。台湾省農業試験所の陳氏は本会議で知り得た一人だったが、7月に台湾より一人で来日され、福岡農総試や九州大学を視察された。このような学会には発表課題を引っ提げて若い方々には是非進んで参加していただきたい。そうすることによって、新しい知識やアジアの農業情勢、ついでに研究の解決手法も入ってこようというものである（少し欲張り過ぎ…）。次回21世紀最初の開催地はフィリピンである。作物学会九州支部の多くの若手会員が参加し、九州支部会がさらに活性化することを期待する。

今回の第3回アジア作物学会は、今回の参加が楽しみとなる充実した学会であった。台湾をはじめとするアジア作物学会関係者、日本からの参加者、同行の松江氏には大変お世話になった。心より感謝する次第である。

以上のように、冒頭で述べたように、私の海外視察報告は極めてエッセイ的な報告となったことを深く会員の方々にお詫びいたし、筆を置くこととする。